

## アフリカの命名法 (中沢秀樹氏へのコメント)

稗 田 乃

「アフリカ人の命名はわれわれには想像もつかないような方法でなされることが多い。それは名前というものの考え方がわれわれと異なるからである」(梶 1985: 48)。梶は、名前が社会で果たす役割に、名前の中に歴史、出来事を刻んでおくことと、名前がメッセージを運ぶことをあげている。

例えば、ザイールのテンボ (ニジェール・コンゴ語族、現在はニジェール・コルドファンとはあまり言わない) の人々の名前に *hábitá* があるが、これは *bitá* 「戦争」に由来し、その名前の持ち主が戦争のあった時に生まれたことを意味すると同時に、戦争という歴史的出来事がその名前によって社会の中に記憶される。エチオピアのコエグ (ナイル・サハラ言語群) の人々のあいだに、*keeda* (筆者の名前に由来する) や *miwak* (宮脇) と呼ばれる子供がいる。名前によって記憶される歴史、出来事には、社会的、自然的状況も含まれている。コエグの名前に *damo* 「朝」が、ルオの名前に *okoth* 「雨」がある。テンボの名前 *ndáményaa* 「私は知らなかった」は、梶によれば、妻が夫にたいして「(夫がこういう人間とは) 知らなかった」とのメッセージを送っているとのことである。

梶は、テンボの人々の個人が持つ名前として、誕生名、第二名、自称、あだ名、自分でつけたあだ名、キリスト教名、祖先霊名、役職名、クラン名、リネージ名を記録している。但し、誕生名を

除いて各人が全てを持つわけではない。これらの名前の中に日本人の「姓」にあたるものはない。筆者の経験では、「姓」を持つ民族のほうが世界でみても稀であると思う。

テンボの社会では、誕生名は本来、生まれた子供が男子ならば、父方の祖父が、女子ならば祖母がつける。あるいは、祖父、祖母の名前をそのままつける。ギクユ (キクユよりギクユのほうが原音に近い) の社会でも同様であると考えられる。ここで興味あるのは、ギクユの社会では父と子は心理的に疎遠な関係に、また、祖父と孫は親密な関係にあり、本人からみて疎遠な者である自分の父と、本人からみて疎遠な者である自分の子が同じ名前で呼ばれることである。父と子の間には守らなければならない様々な社会的禁忌があることも指摘しなくてはならないだろう。ギクユの命名法は、社会のあり様と密接に関係している。ちなみに、ギクユとムンビ (始祖、神ではない) の子供はすべて娘で、男子はいない。waceera, wanjikū, wairimū, wambūi, wanganī, wanjirū, wangūi, mwithaga, waithira の9人である。あと1人をくわえて10人の名前からギクユのクラン名は由来する。もちろんこれらの名前は今日使われている女の普通の名前でもある。ただし、wa- はけっして女性を表わすわけではなく、ある種の名詞、特に動物の名前などに見られる不変化の接頭辞である (ギクユ語は、文法的な性の区別をしない)。

命名法についての日本語による参考書には、梶茂樹「テンボ語における個人名一言語人類学的考察」『季刊人類学』16巻1号、川田順造「モン族の命名体系」『民族学研究』43巻4号、小川了「固有名詞と社会関係 (西アフリカ)」『言語人類学』(和田祐一、崎山理編) 至文堂などがある。

[ひえだ おさむ 大阪外国語大学]